

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ **「学校で知事と語ろう～若者の声を県政に～」**

日 時 平成 25 年 11 月 14 日（木） 15 時 20 分から 16 時 30 分まで

場 所 諏訪清陵高等学校（諏訪市清水 1 - 1 0 - 1）

目 次

1 知事 冒頭あいさつ	1
2 意見交換	2
3 知事 終わりのあいさつ.....	18

1 知事 冒頭あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

私から冒頭一言、あいさつをしたいと思います。諏訪清陵高校の皆さん、今日はこういう形でタウンミーティング参加をしてもらいまして、ありがとうございます。

知事になって3年と少したちましたけれども、県民の皆さんと県政との距離が少し広がりすぎているなあという思いの中で、なるべく県民の皆さんの声を直接聞く機会を作ろうということで、タウンミーティング、それからお昼食べながらのランチミーティングなどをやってきています。タウンミーティングも最初は県が主催するタウンミーティングだけだったものを、県民が主催するタウンミーティングというのを入れていきます。今日は県が主催ですが、県がやるとどうしても堅苦しくなる。するとどうしても段取りを踏んで、「はい、知事のあいさつです、次はなんとかです。」とやってしまうので、県民主催のタウンミーティングで県民の皆さんに段取りも決めてもらってやりましょうというパターンも作りながら、いろいろな対話をさせてきてもらっています。

今日は高校生の皆さんなので、是非長野県の将来に向けて、一緒になって明るいビジョンを描けるような、意見交換にできればいいなというふうに思っています。教育の問題は長野県、いろいろ課題が多いです。事前に皆さんが言いたい意見ということを見ると、あまり教育そのものの話がなくて、また県が調整しちゃったのではないかという気もしないでもないけど、皆さんが今まさに通っている高校をどうするかとか、皆さんが通ってきた小学校や中学校はどうだったかとか、今県立大学をつくろうということで議論をしていますけれども、まさに皆さんもうすぐ大学に行って、そして社会に出て行こうという助走期間なわけで、そういう意味でそういう部分についても、是非時間があれば皆さんからいろいろな意見を聞かしてもらえればありがたいなと思っていますので、よろしくお願ひします。

【広報県民課長 土屋智則】

ありがとうございました。申し遅れました、県庁の広報県民課長の土屋智則と申します。よろしくお願ひします。

それでは、今日はあまり時間がないので、皆さん一人一人の自己紹介というのはできないのですが、ご発言になるときに名前と簡単なプロフィールを言うてから、ご発言いただくとありがたいと思います。それでは早速、意見交換に入ります。意見交換は県の仕切りということではなくて、清陵高校の学友会（生徒会）の仕切りで進めていきたいと思っています。では、よろしくお願ひします。

2 意見交換

【進行役生徒】

進行するにあたり、座ったままの発言となりますがご無礼お許し下さい。改めて、今日数ある県内の高校の中から諏訪清陵高校を選び、足を運んでいただきありがとうございます。私を始めとしたみんな緊張していると思うのですが、現代における高校生のリアルな思いを述べさせていただけたらと思います。よろしくお願いします。

まずは叩き台として、代表生徒3人に意見を述べてもらいたいと思いますので、後程回答をお願いします。

【生徒】

今日も阿部知事は、他県の知事とリニア中央新幹線について話し合ってきたと伺っているので、まずその話題から知事にお聞きしたいと思います。少し前にリニアの正式なルートが発表されて、そのルートは南アルプスを貫いて飯田を通るものでした。諏訪を通る候補もあったので、私たち諏訪の者としては残念です。リニアを始め、長野県は北陸新幹線も金沢まで延伸され、県内の交通事情は大きく変わろうとしています。しかし、ここ諏訪地域はそのような高速化の流れに取り残されているような気がします。北信や東信地域は長野新幹線の開業によって、大きく発展しました。新幹線の効果は大きなものでかつて水田ばかりであった佐久地域は今や大商業圏になっています。リニアの駅ができる飯田や北陸新幹線延伸で飯山市などは、大きくまちが変わっていくでしょう。このように交通網の発達には地域の発展に大きく関係します。そのようなことからやはり、諏訪地域にも交通の便を良くすることをまちの活性化のきっかけにしていきたいです。

そこで提案したいことが、中央線の複線化です。諏訪地域には中央東線が通っています。松本と東京を結ぶあずさが走っているのですが、唯一、この諏訪地域だけが単線区間を通っています。ここが単線であるせいで、中央線の特急の高速化の妨げになるだけでなく、松本の方で電車が遅れても電車が待機しないといけなとか、上り列車が遅れると下り列車も駅で待機しないといけなとかで、たびたび不便なことがあります。この学校に通う生徒の多くもこの路線を使っているのです。私たちの生活にも直結する問題です。親に聞いたら、親が子供だったころから複線化の話があったようですが、何十年も実現しないようです。どうしてこんなに膠着しているのでしょうか。

【生徒】

上諏訪駅前には、数年前まで「まるみつ」というデパートがあったビルがあるのですが、そこ「まるみつ」が閉店して今その広いスペースをあまり十分に活用できていなくて、一階の道路沿いの一部は違法駐輪であふれてしまっていたりするので。さらに、この「まるみつ」が閉店したことで、あの一帯にこれといって大きな施設が少なくなっていて、かなり寂れた雰囲気を感じてし

まっています。

長野県のホームページで先日見た資料によると、今年の夏、諏訪市を訪れた観光客の数というのは、長野市や松本市よりもかなり多かったのですよ。それなのに、このような現状だと思えば、どうしても中信や北信との地域格差とまでは言わないと思うのですが、そういった格差のようなものを感じてしまいます。この度、諏訪清陵に中高一貫というのを導入したというのには、高校生の他地区流出というのを防ぐ目的もあると思うのですが、この地域格差のようなものをどうにかしないことには、おそらく高校生の他地区への流出は防げないと思っています。なので、他はとりあえずこの地域格差というものをどうにかしてほしいと思っています。

【生徒】

私たちは1年後には受験生となって、信州大学の方に進学をする人を除けば、県外に出ていく人が大半になります。そして、4、5年後、僕たちが大学を卒業した後に、諏訪がもう一度戻ってきたいと思えるような場所になってほしいのです。これは将来的に自分たちが負うべき任務でもありますけど、踏切や電柱の多い、この凝り固まった街並みをどうにかしないといけませんし、上諏訪温泉や霧ヶ峰などせっかくある観光資源をもっと生かせないのかと思います。

先ほども意見を言っていましたけど、諏訪を訪れる観光客は長野市や松本市よりもはるかに多いそうです。ですが、この二つの市の方が明らかに発展しています。なかなか変わろうとしないというか、観光資源などを生かそうとしていないということが、残念ながら現状となってしまっています。今、日本の政府が進めているアベノミクスとかの経済政策は、大企業優遇といわれていますけど、諏訪にある企業はそのほとんどが中小企業です。果たして4、5年後に中小企業が元気になって、諏訪も元気になっているのか、そしてそれを県がどう後押ししてくださるのかとても気になります。

【進行役生徒】

とりあえず3人の声を聞いていただきましたが、知事はどうお聞きになりましたか。お願いします。

【長野県知事 阿部守一】

これはどうやってやるの。私が質問に答えるみたいな感じでやるの。私が答えたら、それでまた議論するの。どういう感じで進めるのですか。

【進行役生徒】

その答えていただいたのを、生徒が聞いてそれで思ったことを言ってもらう形で。

【長野県知事 阿部守一】

では、掘り下げていくってこと。

【進行役生徒】

はい、そうです。

【長野県知事 阿部守一】

はい、すみません。3人からいろいろ話をしてもらってありがとうございます。

まず、私はタウンミーティングの時に、だいたいどこでも「あっち側、こっち側はやめましょう。」と言っているのです。あっち側、こっち側というのは、「県民は要望する人」、「知事は答える人」みたいなそんな一方通行のことをやっても地域がよくなるわけがない。私が知事の責任と権限でももちろんやらなければいけないことは、山ほどあります。山ほどあるので、そこは責任を持って県民の代表としてやっていきます。だけど、私だけではできないことも逆に山ほどあって、それは県民の皆さんがやってくれなければいけないこともいっぱいあります。だから、よく行政とかこういう場でありがちなのは、なんか一方的に「経済活性化してください。」とか、「もっと福祉を充実してください。」とかって言われて、知事とかが出てきて、「いやあ、それは前向きに検討します。」などと言って、「それ重要だからよく頭に置いときます。」などという話で、はい終わりということが多いんだけど、そんなことをやっても意味がないだろうと私は思っていて、議論を深めていくという話の方が私はいいと思っています。今出た話、そういう意味ではだから「一緒になって考えてね。」というのが私の思いであります。

まず、最初の方が言った交通の話は、まずリニア新幹線の話はBルート、Cルートという議論があって、そういう意味では結果的に今、飯田に駅を造る方向になっていますが、諏訪地域にとっては残念だったというのは、全く私も「そうだろうな。」というふうに思います。ただリニア新幹線の駅について、今日も山梨県の知事と岐阜県の知事と3人で話していますが、造るは造るで、地域にとってはいろいろな課題はあります。例えば、建設残土はどうするのですか。トラックがバンバン行き来して、自然環境が損なわれてしまうのではないかなど、プラスの側面もあれば対応しなければいけない課題というのも逆に出てきます。だけど、そこを何とか乗り越えて、長野県としては南の玄関口としていい活用をしていきましょうというふうに考えていこうと思っています。

そういう中でお話があって、諏訪は交通が不便じゃないかっていうところは、確かに時間・距離から見れば私もそうだと思いますし、例えば北陸新幹線は今度金沢につながって、その先に敦賀まで計画ができて、さらに我々は、大阪までつなげてくださいと求めています。もともと、北陸新幹線の構想はリニアの話が出てくる前は、東海道新幹線の代替として造ろうというのがそもそもの発想だったので、それはやはりきちんと完結してもらわなければ、長野で止まっているだけでも効果不十分だし、金沢で止まっているだけでも全体の計画からすればまだ途中なので、新幹線計画は非常にお金がかかるけれども、そこはなんとか大阪までつなげてねと言っています。ただ、もう一つリニアの方は、これはJR東海が基

本的な所は全部自分たちがお金を出してやる。普通の新幹線は県も負担していますが、リニア新幹線は全部JR東海がやりますと言っている中で、とはいえ我々も言いたいことは言っていかなければいけないし、地域の課題は一緒に解決してもらわないと困るという立場で取り組んでいます。

そういう動きがある中で、「諏訪はどうするんだ。」という話は我々県も、同じ問題意識を共有しています。このリニアの話と北陸新幹線の話とを並行して、今松本とか諏訪、それから大北地域が、比較的高速交通体系からすると弱いエリアになってしまうので、そこの交通をどうするかということを経済団体の皆さんと一緒に考えて作る場を作ろうというふうに今考えています。今、中央線の話がありました、中央線の話も一つ私は重要なテーマだというふうに思っています。

だけど、例えば諏訪を考えた時に、今日も山梨の知事にはお願いしておきましたけれども、多分諏訪圏域の人の移動の時には甲府、山梨県にできるリニアの駅を使う可能性というのはかなり出てくるだろう。そうすると、その山梨県のリニア駅とのアクセスをどう利便性を高めるかということも、諏訪にとっての課題でもあると思いますし、もう一つは例えば松本空港は今、国内線の札幌・福岡便だけが飛んでいますけれども、これ国際チャーター便をもっとしっかり定着させて、世界に開かれたものにしていくことができれば、またこの諏訪地域の位置付けというのも交通体系の中にとらわれてくる。地域の皆さんが「あれもやってほしい。これもやってほしい。これも必要だ。」と言え、確かにみんな必要だと思います。確かにみんな必要だけれども、それぞれやるにはそれお金もかかるし、体制もきちんと作らなければいけないから、まずどういうところから優先的に取り組もうかということも含めて、そういう場をまず作りますので一緒に考えていきましょう。

私はずっと中央線沿線の東京の国立で育ったので、中央線の話は同じことを感じています。今、中央線は都内に入ると高架化しているのですが、国立も今駅が昔の駅舎ではなくて、高架になっていますが、私の時は地べたを中央線が走っていて、私が子供の時だから、もう40年前からあそこは複々線にしなければいけないのだという話を聞いていました。高架にはしたけれど、まだ複線にとまわっていて、中央線を高速化するにあたっては、都内のいわゆる長距離じゃない短距離の通勤列車と競合しているので、どうしてもスピードが遅くなるという話もあるのでそういうことも含めて考えていなければいけないだろうというふうに思っています。鉄道とか交通基盤というのは、長い時間がどうしてもかからざるを得ない部分がありますけれども、やはり何を指すのかというのを明確にして、それで県がやるだけじゃなくて、地域の皆さんと一緒にこういう方向でやるんだという強い意志を持って、継続的に取り組むということが大事だと思っていますので、私は先だって長野県の総合交通ビジョンを作って、その中で広域的な交流圏をしっかりと作りましょうというふうに位置付けています。そういう一環で、諏訪の皆さんと一緒に交通のあり方を考えていこうというふうに思っていますから、是非そこで地域の皆さんと一緒に知恵を出してやっていきたいというふうに思

っています。単線を複線化する中で連続立体交差をどうするかという具体的な話もありますけれども、基本的には県がなんでもできないよというのは、例えば都市計画事業になると市が担当する部分になってくるので、これ例えば諏訪市なら諏訪市の中で国道 20 号線の話とかが、連続立体交差の話とかがある中で、どういう形で予算を振り向けていくかという優先順位の中で、なかなか進んでないというふうに聞いていますので、そこは諏訪市とも情報共有しながら、どういう交通体系が望ましいのかというのを、はっきり共有して進めていきたいというふうに思っています。

それから、地域格差の話だよ。地域格差の話はなんというか、私は県庁が長野市にあって、広い長野県からするとどうも県庁の場所が北に偏りすぎているせいか、南信の人たちからは「知事は、あまり南信に来てくれない。」とか、いろいろなことを言われることもありますし、南信地域に対しては投資が遅れているのではないと言われることもあるけど、全然そんな意識はないし、そういうことはないと思っています。

地域格差というのをどういう視点でとるかということによって、だいぶ違ってくると思うのですが。例えば、人によってはあまりいわゆる都市化するよりは、農山村の風景がいっぱい残っていた方がいいなと思う人たちもいれば、逆にそんな田舎なんかまっぴらごめんだと、もっと都市的な施設、例えば映画館がいっぱいあったりとか、そういう場所がいいという言う人もいろいろいるので、どれが望ましいかっていうことはないのではないかと私は思っています。

私は、横浜市で副市長をやっていたので、横浜は確かにテレビとかで見ると、赤レンガ倉庫とか、みなとみらい地区ばかりがテレビで映るから、なんだかすごくカッコいいまちだとか元気があるまちだとかいう感じだけど、少し裏に入るといっぱい課題があるわけですよ。そういう場所をどうやって再生しようとか、そういう課題がある中で、私の感覚はいわゆる東京とか、大阪だとか横浜だと同じような形で都市化させることが長野県にとっていいことだとはあまり思っていないのです。とはいえ、それと違った形で人々が集まる場所であったり、まちに賑わいがあったりと、そういうことは必要なので、大都市が今までたどってきた道を同じようにたどるのではなくて、もっと違う形で発展させていく必要があるだろうなというふうに思っています。

昨日も東京に行って、霞が関で要請活動をしていたので、地下鉄に乗って感じたのは、まあ、人はいっぱいいるなど。一見、賑やかで元気だけれども、私は長野県と対比して思うのは、最近東京の地下鉄に乗るとなぜか、たまたまかどうか分からないけれども、人がけんかをしている場面をもう何度も見えています。昔はそんなことはなかったような気がするのだけど、最近なぜか人々が争っているし、電車に乗っていても何となく、人と人との関係性が冷たい感じを私は受けています。

3. 11の東日本大震災があった後に、東京では帰宅難民がありましたね。都会の人たちはやはり、自分たちがいかにも自立した暮らしをしているという錯覚に陥ってしまっていると私は思っています。都会は全然自立していないとって

いるのですよ。横浜市だって全然自立してない。なぜかという、水だって横浜の水源は山梨県の道志村に、まあ横浜市の森もあるけれども、結局他の県のお世話になって、水源を涵養してもらって水を賄っているわけだし、エネルギーでも福島原発の事故で分かったように、遠く離れたところの人たちのある意味、犠牲のもとに都会のエネルギーは賄われているわけで、長野県には大規模な水力発電所がいっぱいあって、東京電力とか大阪電力とかみんな長野県の発電でもっているわけですよ。それから食料も、東京都の食料自給率などは1%くらいだから、何かあった時に、大変ですよ。だから、帰宅難民などでその一端が出て、本当にこれ大丈夫かと、あの時都会の人たちはみんな感じたはずなのだけれども、けどみんな元の状況に戻ってしまっています。

大都会と長野県を比べた時にどっちが強いかなと思ったら、私は確実に長野県の方が強い社会だと思っています。人のつながりもまだまだ残っているし、何かあっても食べ物には困らないですよ。多分、飲み物とか食べ物は都会では絶対困りますけど、この辺で何かあっても2、3日はなんとかなるだろうと、隣近所に借りに行ったりとか、きれいな水場に飲みに行ったりすれば、長野県の人たちは生き残れる。けれども、都会はもう大混乱になるのは間違いないと思っています。そういうふう考えた時に、地域格差の問題で大都市対農山村みたいな対立構造で大都会が進んでいて、我々が遅れているという感覚は全くもってないです。

ただ、長野県の中でどうなのだという話だと思うのですが、私は長野県の中も地域の多様性があるので、多分一律に同じような地域になる必要はないのかなと思っています。ただ、まちの中の商店街がどんどん空き家になってしまうとか、若者がどんどんどっかに出て行ってしまおうという状況は、これは歯止めをかけなければいけないだろうというふうに思っています。それは一つの事を何かやって、実現できることでは多分ないと思います。加えて先ほどから言っているように、知事や県が一つやるだけで、地域の活力が戻るということでも多分ないと思う。それはやはり、県は県、市は市、あるいは皆さんは皆さんで一緒になって、地域を元気にするには何ができるのか、私の役割はなんなのかということ、もう一回問い直して一緒になって考えて行動してもらおうということが一つ大事だと思っています。

だから、県もやろうと思っています。例えば、商店街が空き店舗になっている。例えば、農業もどんどん荒廃してきている。それは何が原因なのかということ考えた時に、いくつか原因があるけど一つやはり原因が大きいのは、後継ぎがないわけだよね。子供の数がどんどん減っていて、昔だったら、兄弟が5人も6人もいて、その中の誰かはうちの店を継ぐだろうとか、誰かは農業やるだろうという感覚であったのが、一人っ子や二人兄弟だと、たまたま一人っ子が東京出て行って帰ってこなければ、後継ぎがもういないからそれで終わりということになってしまっただけだけれど、そこをもっと後継者をしっかり見つける仕組みを作れないかっていうことを今商工会の皆さんと話をして、システム的に「俺たち、このままじゃ後継ぎがないから辞めちゃうよ。」という人たちに、そういうお店をやりたいとか農業をやりたいっていう人をマッチングさせる仕組みを作ろう

かというようなことを今、考えています。

それから企業誘致とか、先ほどの観光資源の話、若者がもう一回戻れるように、観光とかもっと頑張れという話がありましたけど、働く場がなければ若者はどんどん出て行ってしまうので、産業振興・観光振興ということに県の政策としても、市町村の政策としてもしっかり取り組んでいかなければいけないだろうというふうに思っています。例えば、企業誘致なども今やっていますけれども、企業誘致を考えた時に、少し前は道路を造りましょうとか、いわゆる社会資本をしっかりと整備すれば、なんとなく企業が来るという感覚で仕事をしていただけで、私が東京や大阪で企業の人たちと話をすると、あまりそういうことは、もう重要ではなくなってきた感じています。

何が必要なのかといたら、今言われるのは、皆さんは多分、諏訪清陵から見る景色なんていい景色だなあと見ていますけれども、企業の人たちが言っているのは、やはりいい環境、「これからの企業はいい環境じゃなければイノベーション起こせないです、いい発想出ませんよ。」と、それから教育、企業の人たちが働くって、例えば企業誘致した時に、「大人は昼間仕事をするけど、家族はどうするのだ。」と、特に子供の教育をどうするかということは、すごく大事なテーマなのです。

今度、諏訪清陵も中高一貫にしますけれども、私は中高一貫は多様な選択肢を作る必要があると思っていますけれども、やはり産業を元気にしたり、人を引き付けていく上では、教育面でもいろいろな選択肢がなければ人はどんどん出て行ってしまふし、外からも人は来てくれないというふうに思っています。それからもう一つは、医療です。医療がしっかりしていれば、人は来てくれる余地はまだまだある。今まで産業を元気にしようというふうに考えた時には、道路いっぱい造って、工業団地を造って、そうすれば元気になるのではないかという感じが強かったのだけれども、私が今感じているのは、やはりいい環境はしっかり残さなければいけない。景観も守らなければいけない。それから、医療と教育。このところは長野県は健康長寿県で、元々他から見ればアドバンテージがある県なので、もっと地域の皆さんの力も一緒になって、健康な県ですよということを高めていきたいし、この諏訪清陵の中高一貫も一つの取組ですけど、多様な人たちが多様な教育を受けられるような環境を作ることが大事だというふうに思っています。

それから、県内で大学進学 of 選択肢が少ないということを何とかしないとけないと思って県立大学の議論をしているのです。グローバル化に対応した人材を作りたい。少子化の時代に県立大学を何でつくるんだという議論もありますが、私は先ほど言ったように、これからの時代は企業誘致も必要かもしれないけれども、人を呼ばなければいけない。企業はもちろん、企業誘致は人が来るためにやっているところもあるけれども、人が人を呼ぶ時代になってきていると思うのです。こういう人たちがこういうことをやって頑張っているから、例えば、長野県の医療は、佐久総合病院だったり、諏訪中央病院だったり、例えば故若月俊一先生とか鎌田實先生とか、こういう人たちが地域医療で頑張っているのだから、

「私も長野県に携わってみたい。」とか思って来る人たちもいるわけですね。そういうことを考えるとやはり、人が人を呼ぶような社会にしていけないといけないだろうと思っています。そういう意味では、従来のインフラ整備一辺倒で人を呼ぶというよりは、むしろ豊かな環境とか優れた環境をどうポジティブに生かして発信をしていくのかとか、あるいは私が一番大事なのは教育だと思っています。今度、軽井沢にアイザックっていうインターナショナルスクールができます。それから、県が場所を提供して長野市に発達障害の人たちのための学びの場を作ります。普通の日本の一般の、学習指導要領にべったりと準拠した学びの場とは全然違うけれども、やはり自分の持っている能力を生かせる場を作ることによって、やはり人が集まって来るし、地域が私は元気になってくると思っています。そういう発想の一環で私は県立大学も位置づけているところであります。

あとは、踏切・電線地中化という話がありました。私は電線地中化はどんどん進めた方がいいと思っています。だけど、これがまたお金がかかるのよ。無電柱化の話もどんどん進めてくれというふうにやっているのですけれども、1メートルやるのに80万円。穴掘って、電柱取っ払ってやらなければいけないので、今、諏訪地域では無電柱化の事業は諏訪と茅野と下諏訪で、全部で県の事業と市町村の事業と合わせて7カ所、平成21年から25年までの間でやってきているけれども、場所によってももちろん違うけど、1メートルで80万円だから、10メートルやって800万円、100メートルやって8千万円。まあ、何とかそんなに金かかるのかという感じだけど、やはりお金がかかるので、一番景観にいい場所を選んで、計画的にやっていこうというふうに思っています。

私ばかり話していると意見交換にならないけれど、アベノミクスの話もありましたので、アベノミクスの話は全国知事会でも私を含めて多くの知事の人たちが認識しているのは、都会とか大企業は結構プラスの効果あるけれども、それは地方とか中小企業はなかなかそんな実感ないでしょうという話をしています。だから、安倍総理が出たこの間の政府主催の知事会議でも、知事会長からも言ってもらっていますけれども、地域が元気にならなければ、東京とか大阪ばかりが元気になっても、例えばこの諏訪地方を含めた地方が元気にならなければ、日本全体元気にならないでしょう。だから、そういう方向で政府も取り組んでもらいたいし、我々知事会としても、地域が元気になるように頑張っていきますという話をしているところであります。少し私ばかり長く話過ぎたので、あとまた皆さんからいろいろ意見をください、よろしくお願いします。

【進行役生徒】

ありがとうございます。知事の答えについて何か意見はありますか。

【生徒】

冒頭、知事が質問、回答一辺倒のあっち側こっち側の議論はやめようみたいなことをおっしゃったと思うのですけれども、それについてホームページ、若干ですけど拝見させていただいていて、県民主権とか書いてあったと思うのですよ。

それで議論を今、結構たくさんやってらっしゃるってことで、活発だなとか思ったのですが。やはりこっちの方で情報がよく分かってないのですよ。こういうタウンミーティングとか開くということになって、若干ですけど見てみたりはしたのですが。例えば、今さっきおっしゃった中でも僕が知らないことがいっぱいあって、グローバル的な学校建設するとかそういうところも全然知らなかったし、どんなことをやっているかさっぱり分からなかったのですよね。情報がこっちの方にももちろん発信していないわけではないだろうと思うのですが、はっきりと分かる形でこっちに届いていないのですよ。

だから、もう少しきちんと我々でも簡単に探し当てられるように、例えばテレビでもっと盛んに広報活動してもらおうとか、ホームページにきちっと長野県が何をやっているのかっていうのを載せてもらったりしていただけると非常に情報が入ってきて議論もしやすくなると思うのですが、どうでしょうか。

【長野県知事 阿部守一】

はい、それはしっかり受け止めて反省してやります。反省してやりますというか、もうすでに私、県の職員に今ずっと言っているのは、県の職員の能力を3つ高めてくれって言っているのですよ。

1つは共感力、共に感ずる共感力。なぜかという、先ほども言ったように行政はなんというか、「皆さんの言うこと聞きおきます。」と言ってしまえば済んでしまうこともあるわけです。それに加えて、私は一応全責任持っていますけど、普通の県職員は担当が決まっています、少し自分の担当からずれたらそんなことは責任持って何も言えないから、「これは私の話じゃないね。」とか、「今度誰かに言っておきますよ。」くらいで終わってしまうわけです。それはある程度仕方ないところもあるけど、県民の皆さんが、これは本当に悩んでいること、これを本当になんとかしてほしいというふうに思っていることに対して、最初に共感がなければ多分その後はなにも続かない。理屈で考えているだけはいけないのです。行政はどっちかという、法令に則った仕事をきちんとやるという話なので、どちらかという感情を排するような教育をずっとされている感じがしています。

私自身も国家公務員をやっていたから、あまり何か情が入ってはいけないなという感じはあるけれども、もちろん、同じことを言ってきているのにAさんの話はよく聞くけど、Bさんの話は聞かないというそういうやり方は絶対だめだと思いますけれども、だけどやはり、ハートがなければどんな組織同士であっても、どんな人間関係であってもやはりそれは何も伝わらないし、何も進まないで、まず共感力を持ってくれと言っています。

もう1つは政策力。きちんと政策を作る。というのは、国から言われたことをやっているような自治体ではもうしょうがない。あるいは国の補助金を右へ左にまくだけではしょうがない。長野県にとって何が今必要なのかということ県職員が自分の頭で考えて、このためには補助金が必要だとか、このためには条例を作らなくてはならないとか、このためには国に対してもっと要請しなければいけないのではないかと、このためには住民の皆さんにもっと動いてもらうよう

に働きかけないといけないんだという形。何を目的にどういう政策を組むかということをしっかり考えられるように、政策力を高めろと。

それからもう1つが、今おっしゃっていただいた発信力を高めるということ。私は県民の皆さんと一緒に目標を共有して、一緒になって県政を進めていきたいと思っていますが、行政の悪口を言うといけないけど、とにかくやり過ぎず、とりあえず何をやっているか分からないようにしておいた方が、批判もされない。行政は褒められることが少ない。メディアの人たちから批判されることが多くても、「これやってすごく良かったね。」と称賛されることはあまりないので、どうしても情報を出さない。情報の違いのあることによって優位な立場が取れるわけだよね。あなたと私の情報量が違えば、全く打ち勝つことができない。あっちもこっちも情報を持っていることによって、すごく優位性が保てるので、ともすると共有したくなくなってしまうのだけれど、でもこれからは、先ほど言ったように「あっち側こっち側やめましょうね」って私が言っているのだから、共有して進めていかないといけないと思っている。だから、発信力を高めろという話をしています。

そこにいる土屋課長は、広報の担当課長なので、耳が痛くなるほど私に言われている。また、困っている顔をしていますけれども、是非そこはしっかり。県立大学だったらこういう話でやっていますとかね、あるいは中央線の高速化だったら今こうやっていますとか、多分組織の縦割りでやっているので、県民の目線に立った時に今知りたい県立大学はどうなっているかとか、松本空港はどうなっているかとかそういう話が聞きたいので、ただそういう区割りで発信した方がいいなあと、今話を聞いて思いました。ありがとう。

【進行役生徒】

ありがとうございます。他に意見。

【生徒】

情報の優位性とかいう話が今出たと思うのですが、非常に話がずれるので申し訳なくは思うのですが、今、特定秘密保護法案とかあるじゃないですか。その話で申し訳ないのですが、それで国の側の秘密が封をされてしまう。簡単に言うとそうじゃないですか。それで僕個人としては、非常に問題だと思うのですよね。知事個人としては秘密を外に出さないでおこうという政府としての方針について、どう思われますか。

【長野県知事 阿部守一】

これは今も国会で議論している最中だし、野党とも協議して修正をしないといけないなという話もあるので、私がこの場で賛成だとか反対だとかというのは、少し時期尚早なので、控えますけれども、ただ、例えば国レベルの本当の最重要機密事項の話と我々地方公共団体の話は必ずしも同じではないだろうなという感覚は持っています。というのは、我々地方公共団体の持っている情報というのは、もちろん守らなければいけない個人情報とかそういう情報はありますが、基本

的には国同士のセンシティブな問題になる話というのはほとんどないというか、皆無に近いと思っています。日本政府が持っている情報というのは国同士が持っている情報というのがあるので、そこは多分センシティブに扱わなくてはいけない部分というのがあるのは事実でしょう。ただ、その守り方としてどこまで制限をかけるのか、どこまで罰則をかけるのか。あるいは、どこまで第三者機関的なものが関与するのかというところは、今議論されているところなので、そこは比較衡量の問題で、私はこの特定秘密保護法の関係に関わらず、多分今、いろいろな問題が議論されている中で、視点が実は違っているなというふうに感じることは、国があって国民があるのか、国民があって国があるのか。それはいろいろな考え方があるんだけど、そこの捉え方によっても少し違ってくるのではないかという感じはします。私は県もそうだし、国もそうだけどやはり国民があって、国がある。国民を守るため国があるので、どこまで国民と情報を共有して国家のために国民が働く、あるいは国民が貢献するのではなくて、国民のために国がどこまでどういう対応をするべきかという観点で私は考えていくべきかなというふうにしています。そこはまた、皆さんにも是非考えてみてもらえればありがたいと思います。

【進行役生徒】

ありがとうございます。こちらの方で、話題を変えさせていただくのですが、さきほどから、中高一貫の話や教育の事についてキーワードとなるような言葉が出てきているのですが、生徒の方から、教育に関する意見などお願いします。

【生徒】

私は学校での授業について、お話したいと思うのですが。私は学校授業というものは、生徒と教師と時には保護者とPTAとかが、それぞれが折り重なって授業自体も作り上げていくものだと思っているのです。私は中学生の時にそういう授業を3年間経験してきて、とてもいい経験をしたなと思っています。そこでは、例えば問題が提起されていて、その答えを知ることじゃなくて、じゃあなんで、その答えになるのかなというその過程をみんなですっと考えて、授業を作っていたっていうもので、そういう何時間も何時間もかけて考えていくことは、これから私たちが社会に出た時に必要とされる、思考力とか判断力とかそういうものがその授業の中にはあったのではないかなと思っています。そして、そういう授業では常に生徒が主体であって、どんどん意見を交わしてやっていく授業で、そういうものが私は必要なのではないかなって思っていて、授業っていうのはそういうものなのではないかなと、私は個人的に思っているのですが。

私は今の中学校とか高校の授業っていうのは、ちょっとそういうものとはかけ離れているというか、言い方は大げさで良くないのですが、先生が黒板にガガガって書いたのを、生徒が「あー。」って言って、つらつら書いて、ただその一方的なもので終わってしまっているような気がして、それがとても自分の中では今、高校で授業を聞いていて、ものすごくもどかしいなあって、もっと自分はこう思

ってみたいな、そういうのをすごく私は授業中に思っているのですが。そういうのは、この清陵高校とか長野県っていった枠組みに限定されているものじゃなくて、日本全体でそうなのではないかなと私は思っているのですが。確かに高校ではやることもたくさんありますし、授業もたくさんをこなしていかなければいけない。カリキュラム的にもこういうふうに、どんどんきちきちやっついていかないと終わらないんだよっていう科目とか、無駄な時間を使えないっていうものがあるというのも、重々分かってはいるのですが。

例えば、海外に行った時にフィンランドとか学力がすごく高い国というのは、私はちょっと本で読んだだけなのですが、授業中に子供がどんどんどんどん、教室を歩き交ったりとか、生徒同士で、グループで討論してそれを授業で発展させていくというものだとか、そういう思考力を最大限にフル活用させた授業を行っているを読んで、私は将来教育関係の仕事に就きたいなと思っているのですが、生徒も教師も保護者もみんなで作り上げられるような授業を、少しでも日本の教育の中に導入といいますか、ちょっとこう取り入れられたらいいなと私は思っています。

そこでお聞きしたいのですが、知事は学校の授業、中学校、高校とかに限らずでも構わないのですが、学校の授業というものはどんなものであるべきか、どんなものであってほしいかと思っただけとか、もし知事の中で今の日本の、長野県の学校授業の中で改善した方がいいのではないかなと思っていることとか、もしそういうことがあったら、教えていただきたいなと思います。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。他の子も聞いてしまった方がいいかな。みんな教育の話、セットで言ってください。私は今の話はいい話だと思っただけで、時間がなくなってもいけないから。

【生徒】

知事が先ほどおっしゃった、長野県には教育が大切だということは日本全体としてもいえることだと思っただけで、軽井沢にインターナショナルスクールができるとか、清陵中学ができるとかそういう新しい試みとかそういうのがあるのは、すごくいいことだと思うのですが、そういうところがあると人気が出て入試といいますか、入るのに試験があると思うのですが、その難易度が上がって、どういう科目が出るか分からないのですが、やはりそういうところに行くには塾に行ったりしなければ入れないとかいうことがあって、そういうことがあるとやはり親の収入による格差とかが出てきてしまうと思って、親の収入に関係なしに子供が平等な教育を受けられるようにするにはどうしたらいいのかというのを伺いたいです。

【生徒】

知事は県立の大学を作るとか、インターナショナルスクールを作るというふう

に高校、大学、もっと義務教育の過程を離れてからどうするかということをおっしゃっていたのですが、義務教育を受けている時点でもっと学ぶ場所等を充実させた方が僕はもっといいなって思うのです。教育について思うのは、校舎の汚さとか建物の老朽化であって、僕の母校である小学校を例に挙げると、今は工事されてきれいになったのですが、僕がいたころは机やいすが、ギシギシしなっていたりとか、特に体育館なのですが床がささくれになっていて、子供が遊ぶ時にすごく危なかったりとか、跳び箱なども全然使えるかどうか分からないような状態でした。教育って学習だけじゃなくて、時には体育館でのびのびと遊ぶというのも教育について必要だと僕は思って、雨漏りのしているような体育館で、のびのびと子供が教育を受けられるのかというのが疑問に思っていて、もっと校舎の環境が上がれば教育の質も上がって、長野県の活性化の話が、企業も入ってきたりとかかなと思うので、それで多分、市立の中学校とか小学校っていうのは市がやはりお金を出さないと工事等行えないですけど、それはもっと県から市へ補助金とか、多分行っているとは思いますが、もっと出せるのではないかなと思っています。僕らの税金なので、もっと資金を増やして、小学校、中学校、義務教育のうちからもっと教育の質が良くなればなど僕は思います。

【長野県知事 阿部守一】

3人から教育について話をしてもらったのですが、まず最後の話からいくと、私は、補助金行政は嫌いなのです。嫌いというのは、補助金があればやるけど補助金がなければやらないものなんていうのは長続きがしないですよと言っているわけです。別に補助金が全部悪いとも思わないし、必要性がないとも思わないのだけど、でも基本的に誰が責任を持って取り組むかということを前提にした上で、「ただここを少し何とかしなければ進まないね。」とか、「ほんの少しだけインセンティブがあれば進むのに、ここで止まってしまっているからもったいないね。」というところには、補助金は有効だと思うのです。

教育の話で私が一番問題だと思っているのは、誰が責任を持っているのか明確じゃないところです。県立高校は誰が責任を持っているの。私は県立高校の先生方の人事権は持ってない。県立高校は県の教育委員会が持っているわけですよ。

私は中教審で教育制度の議論がされているところで、全国知事会の代表として意見を言ってきました。きちんと権限と責任を明確にしてくれと。要は首長と教育委員会の権限が今は非常にあいまいだと。最終的に例えば、先生方の不祥事があれば頭下げるのは、県民から選ばれた首長、私や市町村長なのですが、責任がないのに謝らせるだけなんていうのは、おかしいだろうという話をしています。

もう一つ、教育が分かりにくいのは、まさに先ほど言ってもらったように、公立の小中学校は市町村立なのです。そうするとまたまたややこしくて、最後は市町村の教育委員会が責任持っているのか、市町村長が責任持っているのか、県の教育委員会なのか。一応先生方の人事権は小中学校でも県の教育委員会が持っているのですね。だから、小中学校の30人規模学級をやる最終的な判断は私がするわけです。予算の権限は知事が持っているのです。小中学校の先生方を増やす

か減らすかは私が決めているわけです。だけど、教育の権限はないので、教育内容は私は全く口出しをしていない。

これは本当に分かりづらい。これはやはり、いろいろな意味で教育行政を改革していく上では、私は問題だというふうに思っているのだから、県と市町村との関係、それから教育委員会と首長との関係はまずしっかり整理しなければいけない。補助金を出すということも場合によったら必要かもしれないけれども、でも私は市町村立学校は市町村長が責任を持って予算措置をしてもらおうということが、大前提だと思っている。それが民主主義なんだよ。だって市町村の事は市町村長に託してみんなで選挙やっているわけでしょ。みんなで選挙やっているのに、だけどもまあこれ国の責任だとか、県の責任だということでは市町村立学校をやり出したら、では結局、誰が本気でやればいいのかというのは、不明確になってしまって、県が補助金を出さないから小中学校の施設は良くなるのだと、それなら知事を代えてしまえという話でも私はいいけど、それだと本当の民主主義社会ではないなというふうに私は思っています。

ただ、教育環境をきちんとしろというのは、私も全くそのとおりでと思います。長野県の県立高校も、あるいは県立学校も施設がぼろいよと、なんとかしろということはずっと言われ続けています。ずっと言われ続けているので、未修繕の経費は私が知事になってから大幅に増やさせてもらっていますけれども、まだまだ緊急的に修繕するようなところを優先的にやるので精一杯で、皆さんが満足できるような水準にはなっていないというふうに思っています。だけど、ここは努力していきたいと思います。

皆さんに知っておいてもらいたいのは、県の予算は約8千億円強です。その中で教育関係の予算は先生方の人件費も含めて約2千億円。県の予算の中で4分の1弱は教育関係の経費。これは土木費だとか社会福祉経費だとかを上回って、県の予算の費目の中では最もウェイトが高いのが教育費です。だから、教育にはきちんとお金は入れているけれども、でも皆さんから見ればまだまだ足りないという状況だと思っていますので、そこは引き続き頑張ります。

それから、収入格差をどうするのだという意見。これは今まさに、高等学校の無償化を変えて、高所得の人たちからはきちんととって、収入の低い人の支援に回そうということを文科省がやろうとしていて、この教育における収入格差が教育格差に結びついているのではないかというのは、これはおっしゃるように日本全体の問題だというふうに思います。私も今県立大学の議論を行う中で、奨学金をどうするかということを中心にきちんと考えなければいけないというふうに思っています。

それから、さらに本質的な話なのだけど、なぜ収入の格差が教育格差に結びついちゃうかという、受験だよ。学校の成績が良い人が頭の良い人みたいな話になってしまっているから、みんなで一生懸命塾に行かなければいけない。塾に行くにはお金がいる。お金がない家庭は塾も行けない。だから差がついてしまうじゃないかという話になっているので、私は大学入試のあり方も考え直していかなければいけないだろうというふうに思っています。日本の教育は私はいろいろ

なところで言っているのは、今までの日本の教育の仕方というのは、今までの社会の目指す姿からは合っていたのだと思います。物の豊かさを求める中で、日本は、この諏訪地域もそうだけど、工業社会の中でより効率的に物を作ろうと、より画一的に大量生産の社会を目指そうとやってきたので、みんな同じような発想で、みんな同じような行動をして、みんな基本的な知識を持っていることが、日本の社会の発展にとってはすごく大事なことだったというふうに私は思っています。だから、今までの日本の教育のやり方というのは、それはそれで私は実は成果を上げてきたのではないかなと思います。

だけど、これから将来に向けて、そんな社会ではあり得ないからね。県立大学では、先ほど言ったようにイノベーションを起こせる人材を作ろうと、グローバル社会に対応できる人材を作ろうということを掲げていこうというふうにしていますけれども、みんながみんな同じことをできて、平均点が高いやつが勉強ができる人みたいな発想では世界の中では絶対に戦えないですよ。

先ほど学びの場という話を少ししたけれど、これも多分皆さんの所にあまり情報が届いてないと思うのですが、発達障害の人たちで高校を出たような年齢の人たちをまず対象にやっていこうと思っています。これは、NPOの人たちにやってもらいます。東京にある翔和学園という人たちがやりますけれども、是非機会があったら見に行ってもらいたいけど、すごい教育ですよ。間髪入れずに、ばんばん発達障害の人たちに合った教育をしています。

例えば、スティーブン・スピルバーグも学習障害だというふうに言われていますけれども、そういう人たちの中にも優れた能力を秘めた人たちはいっぱいいるわけです。そういう能力をもっと引き出してあげなければいけない。例えば、芸術の才能を持った人たちだっているし、あるいは優れた記憶力を持った子たちもいる。だけど、今の日本の教育の仕組みの中では、みんな国語もいい成績、算数もいい成績、体育もいい成績、それぞれ普通ぐらいはとってなかったら、「この人はなんだか、大丈夫。」という話になってしまっている。それが今の日本の社会なので、それを変えなければいけないと思っているのが、長野県が作ろうとしている学びの場の発想です。翔和学園の人が言っていたけど、デコボコって言っていますけど、デコボコがならされる教育をしているのが今までの日本の教育だけど、「デコボコ、いいじゃないか。」と、伸びるところはどんどん伸ばしてやれということをもっとやっていかなければいけない。

やはりこれからはそういう部分が求められていて、私は学生の頃、国語・算数・理科・社会みたいなところは平均的にいい成績だったから、大学入試の時もなんとなく大学入試できてしまったなという感じだけでも、今までの勉強してきた人生を振り返ってみて思うのは、まず学生の時もっと勉強すりゃよかったなと。もっと勉強というのは、受験勉強すればよかったという話じゃなくて、もっと本当に勉強すること、学習することの楽しさを、面白みというのを自分自身で自覚していればもっといろいろなことができたかなというふうに思って反省しています。

先ほど言ってくれたように、学校のあり方を私は変えなければいけないだろう

と思っています。それはいろいろなところから変えていかなければいけなくて、一つは大学入試のあり方を変えなければいけない。県立大学はできればまだ、構想段階なのであんまり具体的なところが決まってないけど、私の思いとすればせっかく県立大学をつくるんだから、長野県は県立高校のウェートが高いよね。県立高校の校長に是非頼み込んで、のべつまくなし成績がね、オール5とかそんなことじゃないけど、こいつは語学力は必ずもっと伸びるよと、あるいはこいつは平均点は少し低いけど、理科は抜群の才能があるから県立大学に入れてくれとか、入試のあり方も是非変えていきたい。そうすると、高校以下の教育の仕方というものもおのずと変わっていくでしょう。

県立大学の議論をする中で、本当にいろいろな大学関係者の人たちと話をしています。この間も東大の総長の濱田さんとお話しして、東大の秋入学やろうと言っていましたけれども、結局4学期制のところまで止まってしまっています。濱田総長は言っていたけど、やはり抵抗感強いのだと。「だけど私は改革の旗は降ろしませんよ。」と言っていました。

皆さんもほとんどが大学を目指すと思うので言うておくけど、どこの大学でも今大学のあり方を変えていかなければいけないと強く思っています。強く思っているけれども、あまり言うといけなくて、例えばある人が言っていたけど、既存の大学を変える時にはいっぱい障害がある。教授会が反対すると何も決められないとか、いろいろあるわけです。そういうことを乗り越えて、大学改革を進めなければいけないというふうに思っている人たちが世の中にいっぱい出てきますから。

長野県立大学の基本構想とか基本方針を見てもらうと分かるけど、私は基本方針の中に大学改革を先取りしようと、先駆的な取組にしていこうということを県立大学の一つの取組に掲げています。県立大学の今の構想は、入った後も1年生から全員寮に入れてしまおうという大学です。とにかく大学1年に入ったら、私もそうだったけど、今は「遊んじゃえ。」という学生が多いんです。私も後悔しているのは、大学1年の時には雀荘ばかり行き過ぎて、授業料の半分くらいしか元が取れなかったと思って反省していますけど、アメリカの大学にしても、海外の大学というのは勉強するところで、別に麻雀するところじゃない。日本の大学は、とくに文化系の大学は何となく卒業できてしまったりするので、そういうふうになっているけれど、県立大学は少なくとも1年生はきちんと寮に入れて、きちんと勉強しろと。必ず海外体験は、1年の留学かもう少し短期かは別として必ず海外体験をさせようということをやっています。この教育改革は日本全体の課題でもあるし、県立大学は、まずそういうふうに変えていこう。私は大学だけじゃなくて、高校とか小中学校のところも変えていかなければいけないというふうに思っています。

今、長野県の教育は学校の先生の不祥事が相次ぐ中で、好むと好まざるとに関わらず、教育制度の改革をしろという話になっています。だけど私はこれをネガティブな形で、消極的に受け止めるのではなくて、この際、長野県の教育のあり方をしっかり変える契機にしていこうということで、教育委員会の皆さんと話し

ているというのが今の状況です。

そういう意味では皆さんの問題意識は、私は全く共有をしているところであります。これは県民の皆さんの応援が必要です。教育というのは、いろいろな人がいろいろな意見を持っています。誰でも教育については意見を言いやすいし、自分たちが受けてきた教育を見て、こうあるべきだ、ああするべきだといろいろな意見があります。でも、いろいろな意見をいろいろな意見として聞いていだけじゃ何も進まないの、長野県の教育はこうだという方向で、まずは県立大学は「グローバル」、「イノベーション」、こういうものをキーワードに進めていこうと思っていますし、義務教育でももっと開かれた学校を作っていこうと思っています。

信州型コミュニティ・スクールを作っていこうということと合わせて、机に座ってのお勉強ができればいいという話ではないにしても、学力向上、長野県の子供たちの学力はかつて教育県と言われて、今でも私は他の県に行けば「長野県は教育県ですね。」と言われます。「では、どこが教育県だ。」と言われたときに、胸を張って教育県だと言えるかというといろいろな課題があるなと思っているので、教育再生は私としては重要な課題なので、皆さんの意見をもっとどんどん出してもらって、一緒になって改革をしていきたいと思っておりますので、よろしく願います。長くなっちゃってごめんなさい。

【進行役生徒】

ありがとうございました。時間の関係でこの後の予定もあると思っておりますので、生徒からの意見交換は終わりにしたいと思います。では会を閉めるにあたり、生徒を代表しまして謝辞を述べさせていただきます。

【生徒代表】

今日はこのような会を開いていただき、僕達が日ごろ思っている意見等を知事と話すことができ、僕は自分が日ごろ思っている教育についての問題について、知事の意見を聞いて本当によかったと思います。知事は大事なものは教育だとおっしゃっていましたが、僕はとても共感しています。多忙な中、長野県に多々ある高校の中から僕らの高校にお越し下さり、ありがとうございました。

3 知事 終わりのあいさつ

【長野県知事 阿部守一】

今日はどうも本当にありがとうございました。少し私が長く話し過ぎて申し訳なかったのですが、本当に長野県をこれから背負って立ってもらうのは、皆さんたちです。

先ほどから言っているように、知事としてやるべきこと、取り組むべきことはいっぱいあるけれども、私だけではできないものもいっぱいあります。加えて、

長野県をどういう県にしていきたいかというのは、これは私だけが決める話じゃなくて、県民の皆さんが同じ方向を向いてこそ、やはり実現するわけでありまして、さっきの交通の話だとか、まちが元気なくなっているのではないかといういろいろな課題はあります。課題はあるけど、私は今まで人生 52 年間生きて来て、こういうふうにしようと強い意志を持っていれば、必ず実現できるというふうに思っています。それは、個人もそうだけど、地域社会も同じだろうと思っています。地域社会全体の人たちが後ろ向きになって、「俺たちの地域はだめじゃないか。」というふうになったら、絶対そんな地域は良くなれないというふうに思っています。

私は県知事としてさっきから言っているように、長野県は日本の 47 都道府県の中でも非常に強みを持った地域だと思っていますし、これからの未来の日本のあり方、あるいは世界のあり方を考えた時に、先進的な地域に十分なれる場所だというふうに思っています。大阪だとか東京だとか、旧来型の発展した都市とは違った強みを我々は持っています。そういうところをやはりもっと生かしていくことが、私の知事としての責任だと思います。だけど、それを進めていくのは私だけではできません。是非皆さんが、自分たちのこの諏訪、そして信州に誇りと自信を持って、力を出し合って、いい地域にしていこうという思いを具体的な形で共有をしてもらえれば、必ず私はもっともっと発展していくし、もっともっと暮らしやすい地域になっていくと思っています。

これから皆さん、まだ社会に巣立っているいろいろな道に行かれると思いますけれども、諏訪で活躍する人も、長野県で活躍する人もいれば、他の地域で活躍する人、あるいはグローバルに活躍する人もいると思いますけれども、でも私はふるさと、故郷っていうものは多分皆さんの心の中に確実に残る話ですし、そういうものをしっかり根っことして、諏訪清陵高校なんて伝統もあるし、いい先輩たちもいっぱいいる学校なので、そういう伝統とか文化とかそういうものをしっかり受け継ぐ中で、これから活躍していつてもらいたいなと強く期待しています。いろいろな形で長野県のこと、皆さんのそれぞれのこれからの将来の中でね、「こういうところは長野県に協力できそうだな。」とか、「こういうところで自分の仕事でやれば諏訪ももっとよくなるのではないかな。」ということ、少しずつ皆さんが思い続けてもらえれば、確実に長野県はいい県になりますし、私も責任を持って、任期はもう 1 年弱になってしまっていますが、頑張っているいい県にしていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。